
イージー・カム

あゆみかん

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

イージー・カム

【Nコード】

N2257E

【作者名】

あゆみかん

【あらすじ】

【シリ阿斯ノ恋愛ノ音楽ノ文学ノ連載中】

『Candy』……キャンディ。お菓子。女の名前。甘ったるい。

甘くする。甘美な。臆病 「もっと聴きたい……」一度芽生えた

主人公・愛の想いは加速し始める。アーティストの夢の先を追って

H20/9/8・第9話（天国）追加。

1話(歌)(前書き)

不定期追加更新で日は空きますが、完結はしますので安心してお読み下さい。(たぶん)。

宣伝用にブログに挿絵を描いています(ちょこつとだけ……)。

<http://ayumanjyuu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-80.html>
こつそりとレンを……

1話(歌)

『Candy』

キャンディ。お菓子。女の名前。甘ったるい。甘くする。甘美な臆病。

『Party』

パーティー。仮面舞踏会。社交場。上っ面。表面。人生。

単語一つに複数の意味。

込めた思いは 込めた本人のみぞ知る。

日本で言えば、掛詞。

これを技巧に繋げる者を 我 称賛す。

Easy Come . . .

歌が聞こえた。あの人の歌が。

あの人を作った あの人が書いた あの人が奏でた あの人が歌った

あの人を作った、歌が。

それは愁いを帯び、物悲しく私の心に自然のように入ってくる。

あなたにも そんな経験が なかっただろうか、と問いかけてみたくなった。

「ちわーっす。お届け物です」

マンションの一室。せつかくの音楽空間を台なしにする雑音のよ
うな声。「まったく もう！」

気分を害された愛は、手に持った四角く白い無地のクッションを
2人掛けのソファに叩きつけた。

そして普段着のまま玄関へ。何も知らない宅急便屋の若い陽気な
男は汗をかきながら「まいど」と。営業スマイルで業務に戻って
行った。

ボタン。

玄関の重みのある鉄のドアは、勝手に閉まる。ガチャリと内鍵を
閉め、ため息をつきながら愛は手に持った、厚みのある簡易梱包さ
れた封筒を見る。

送り主である会社名を見て、ふふふと笑いを一つ。

愛は知っていた。中身が何なのかを。

CD。

音楽の、CDであった。愛が今、好きで好きで たまらない、バ
ンドの。

バンド名は『SAKURA』。インディーズだが、地元人気
は非常に高い。

ボーカル、キーボード、ベースギター、ドラムと。4人グループ
として成る。洋楽スタイルを好み、歌詞には英語が多く。ロックか
ジャズ色で演奏する事が頻繁だった。質としては若さゆえに荒っぽ
く粗削りな部分が見えるも、100人ほどが入る事の できるライ
ブハウスでは毎度 毎度 満員で盛り上がっていた。

特徴的なのはボーカルの声質、歌唱力と抜群のセンス。パフォー
マンスなど決して派手では ない。愁いと、皮肉を織り混ぜた歌声
は どんな遠くに いる お客の心にも入り込み響き打たせて、

じわじわと、ゆっくりと浸透させていく。重量感が あり、それでいて透明で繊細な声質だった。

音楽に通じる者の一部の間では、彼の事を神と崇める者も いるらしいと聞く。彼のカリスマ性は着実に その広がりを見せていった。恐らくメジャーからの声がかかるのも時間の問題だろう。

「はあー、やっと届いた。ネット注文、初めてだったから ほんちに注文できてるんだかどうだか、分かんなかったのよねえ〜と」
独り言を言いながら、愛は簡易包装されている包みを破いていった。開けながら、ソファにどっかりと腰を下ろし体を埋めさせた。封筒の中から出てきたCDを 裏表と ひっくり返してみたり、何故か匂いを嗅いでみたり。そしてソファに寝転がりながら、
「私は、どうして彼の事が好きなんだろう」と、聞いてみたりした。

神経は大丈夫だと自信は ある愛だが、少し周りからは変わった子と言われる事も昔からあった。それは大学生に なった今でさえも。

バンドとの出会いは友達からの影響による。音楽好きの友達から、複数のインディーズ系アーティストやバンドの曲を集めたコンピレーション・アルバムを1枚借りた愛は、全曲 何回も部屋で流し続けていた。

その中で、どうしても忘れられない、流し終わった後でも耳にいつまでも残ってしまう歌があった。

『 Candy 』……

それは、お菓子の名前。甘美な、という形容動詞。臆病、という意味として使われる事も あるという。

「素敵……」

何度も繰り返し聴くうちに、虜になつていて自分を見つけた。それはもう、ご飯も喉を通さないほど。眠気も起きないほどに。まず思ったのは、歌う彼が何者だという事だ。

「REN」……レン」

CDのジャケットに書かれた参加アーティストの一覧の中に名前を見つげる。SAKURAというバンドの名前のボーカル担当は、レン。

(もっと聴きたい……)

一度 芽生えた想いは加速し始める。

音楽というジャンルに対しては今まで何も関心が起きなかった愛は、初めて自分から音楽に触れてみようと思つた。彼ら、彼のおかげで。そして それは愛に、次々と行動を起こさせていく。

バンドと同名のCDを探し、買い集めたものの中から自分のお気に入った歌の歌詞を訳してみたりした。歌は ほとんど英語。言語の壁を感じて唸りながらも、歌詞の意味を追つていった。

中には、どうにも捉えようのない言い回しや単語があり、愛を一日中 苦しませる事も しばしば あつた。そんな時には、その悩ませている曲をプレーヤーに かけて部屋で流しながら聴くと、自然と何か答えが閃いたりするのだ。

これを「レンが教えてくれた」と手を合わせ、窓から差し込む光を浴びて太陽を拝む。

歌詞には まるで言葉という宝か宝石かが詰まっているかのよう
に、次第に愛を別の世界へと導いていった。

夢をベルという女の名前で呼んでみたり、パーティーをうわべだけの人生だと皮肉つてみたり。一つの単語にアレもコレもと意味を複数込めてみたりと。

その技巧さのレベルは、確実に凡人の域では なかった。

しかし愛には、歌詞の内容が とてもよく理解できた。それが何

故なのかは、愛自身にも分からなかった。

身は 時という概念のもとに とても近づくことは できないね
でも 心は 近づける

僕は パーティーで キャンディを 拾った
君が落とした キャンディを 拾った

口に入れたら 甘くて 溶けて なくなった

でも僕の中で キャンディは 消えない

……直訳を経て、シンプルにまとめた歌の歌詞。愛には内容が理解できた。

そして感動し涙する。

「レンは、傍には いないけど……レンの声は歌で私に届いたわ……
……そういう意味なのね？ レン……」

そして君とは、キャンディの事を。キャンディという形は姿を失くしても、心の中では ずっと残っている。

彼は歌った、キャンディを。たくさんの気持ちと意味を込めて。

これを技巧と言わずして何と言おうか。

「レン……会いたい……」

愛の気持ちは加速していく。

止まらない。

彼の事をもっと知りたい。今は何を考えているのだろうか……と。

「ん？」

少し、これまでの事をソファに寝転びながら思い返していた愛は、開けたCDケースを見て首を傾げた。

CDに何かが張り付いている。

長細い紙である。ライブチケットみたいな事が書かれて……。

「ライブツ！？」

ガバツと愛は体を起こし両手で紙だけを持った。目が見開かれる。そして両手が小刻みに震えてきていた。

「『CD発売記念100人限定 内緒のライブへ ご招待』……ないしょ？」

声も震えてきた。

「『このチケットで あなたにライブの参加資格が与えられます』って。要するに、私……当たったのっ！？」

それは奇跡のようだった。愛にとっては運命とさえ感じてしまうほどの。

愛は動き出していく。

止まらない。

たとえ先に何が待ち受けていようとも。

構わない。

イージー・カム

1話(歌)
(後書き)

2話（開演時間まで）

E a s y C o m e . . .

それはバンド『SAKURA』の、先週にリリースしたばかりの新曲だった。もちろん、愛は即行で購入する。

販売はパソコンなどで彼らのホームページへ行き予約 注文する、というものだった。ネット先行 販売を終えてから一般に市場 販売を開始するとホームページに書いてはあった。

パソコンなど普段から あまり なじまない愛だったが、友達に頼んで予約してもらい、数日かけて やっと愛の手元に届いたのだった。

今の愛の頭の中は彼らの事で隅々まで いっぱいで ある。彼らの音楽が愛の生活に大きな影響を与えているのは明らかだった。運命をも本人知らずに変えてしまっているのかもしれない。

E a s y C o m e . . .

ボーカルの彼の名前はREN。レン。

重量感があり、けれど繊細で、鼻に かかったような独特な声を出す。聴いていると何時間も時を忘れて聴きいつてしまう、その声質そのセンス。

愛は虜だった。

彼の賢さも、歌詞を訳して意味を理解できれば言葉で証明できる。

イージー・カム

「イージーカムの後は、何て続くんだらうな……」

イージーカムといえば、イージーゴウと思う人がいるかもしれない。

『Easy Come , Easy Go 』
日本のことわざで言えば、“得やすいものは失いやすい”である。

「……………」

愛は自分の部屋のソファの上で、開けたばかりのケースの中のCDを見つめた。CDに貼りつけてあったライブのチケット。なんと100人限定ライブ招待チケットで、愛は見事に当てたのだった。
「行くわよ、もちろん！」

両手に力を入れ、立ち上がった。

今の愛を止められるものは、何も ない。

あなたに僕が見えますか

あなたに僕の声が聞こえますか

見えやしない

届きやしない

だまされている

だまされて喜んでいる

人生は お飾りなんだ パーティーなんだ

新曲を聴きながら、愛は口ずさむ。ただ、歌詞は全て英語だったために愛から放たれる言葉は意味不明な言葉だった。もちろん愛自身、そんな事は とつくに分かつている。

頭の中ではレンの声が響いている。歌が終わっても再び始まる。歌は手に持つCDプレーヤーに最初に設定された通り、エンドレスで繰り返し繰り返し同じ曲が流される。

何度 聴いても飽きは しなかった。それどころか、まるで自分がレンの一部に でもなったかのような錯覚を覚えた。断言してしまってもいい、自分はレンと共に あると……。

時刻は ちょうど夕刻6時。開始 予定は7時からだと手元のチケットには書いてあった。

愛は電車を乗り継ぎ、来た事も ない地へと赴く。電車の中では帰宅ラッシュ時で あるにも関わらず、混み合う人ごみの中 幸運にも座席に座る事ができ、おかげで着くまでCDプレーヤーのイヤホン越しにレンの歌声を満喫する事ができたのだった。

何とか迷う事なく、ライブチケットに書かれていた簡単な地図と案内を頼りに。愛は辿り着く事が できた。

ライブハウス。

ここに来る前に詳しく調べておけば よかったかなと、愛は思った。動員数が100人という事で。しかも、内緒のライブと聞いている。

こじんまりとした店を想像していただけに、愛は「え？ こんな所？」と軽く首を捻った。

5階建ての白塗りの壁の素っ気ないビル。見上げても、『英会話』

『軽食ザッツ』などの小さい看板が各階に添え付けてあるだけの入り口は開閉のドアもなくスツポリと横穴が空いたように奥まで続き、突き当たるとエレベータがある。人が辺りにまばらで、女の子ばかりだった。

2、3人の知り合い同士で固まって談笑していたりしている。ピノクのキャミソールを着た、一番ここに居る中で涼しげな格好だと思った女の子と愛は目が合う。しかし向こうの方が先に目を背けてしまった。

彼女らもライブに？ ……愛は少し心細げに前に歩を進めた。

エレベータに着くまでの道伝いの壁に案内板が設置されていたので、愛はチケットに書かれていたライブハウスかバンドの名前を確認しようとした。

しかし変な事に気がつく。

ライブハウスの名前で ある『SHOW TIME』（シヨウタイム）と、手書きな上に黒マジックで横書きされた白い紙が案内板の『屋上』の位置 部分に貼られていた。

屋上？ もはやハウスでは ない……愛は首を傾げる。

エレベータの呼び出しボタンを押そうとした時、後ろから声をかけられた。

「さつき店長の人に来て、開演 時間までは来ないで下さいって」

愛は振り向く。先ほど視線をかわされたキャミの女の子だった。栗色の茶髪を、後ろでアップに しており派手なラメ入りのピン止

めで、巻きつかせるように留めている。化粧はナチュラルメイクで、少し甘い香りの香水をつけていた。

高校生くらいだろうかと愛は思っで一瞬だけ たじろいだ。高校生相手に どの目線で話せばいいのかを考えてしまった。

「そ、そのなの……ありがとうございます」

「あんたもライブ？ 当たったワケ？」

愛の返事など聞いていない寸秒の間で相手は質問してきた。愛は「ええと……ええ、はい」と頷いた。

「フウン……」

相手はジロジロと愛の顔を舐めるように見る。あまり気分のよいものでは なかった。愛は、ただ我慢して相手の次の言葉を待った。「ギターのシークが好きなんだあ。あのサウンド、シビれちゃう。あんたも そう思わなあいい？」

予想も していない事を聞かれたので、愛は言葉を失った。「…

…」

頭が回らない。

困った愛だが、何とか頷いた。

「だよねえ」

名前も知らないキャミの女の子は、鼻で笑うような仕草をとった後。愛から離れて、元居た集団の中へと戻って行った。

出迎えた集団から、笑い声上がる。何だか自分が馬鹿に されているんじゃないかと愛は不安になって冷たいコンクリートの壁に体を向けて身を固めていた。

早く開演時間になってと、祈る気持ちで。……

人生は お飾りなんだ パーティーなんだ

僕も そうなんだ

(『僕も』……？)

愛の脳裏にクエスチョン・マークが浮かぶ。僕、即ちレンは、何が自分も そうだというのだろうか……と。

開演時間に なるまでの間、不安な愛を記憶の中のレンの歌声が支えのように優しく包んでくれていた。

歌詞の内容など、関係なく……だ。

3話(お礼)

E a s y C o m e . . .

やがて、エレベータの出入り口が開き 出てきた人物に、その場に居た全員の目が向けられる。

愛も だった。しかし登場したのはレンでも なければバンドメンバーの誰でも ない。

ただの白のカッターシャツに黒のズボン、黒のネクタイを締めた、普通の細身の若い男だった。

男は恭しく頭を深く下げ、片手は底の丸いワイングラスを持つように胸前へ持ってくる。

「長らく お待ちの事と思います。本日は ようこそ足を お運び頂きました。誠に感謝 致します。では」

バンドのマネージャーだろうか。それとも、ライブハウス(か謎だが)の店長だろうか。主催 関係者で ある事には間違いはない。しかし……。

愛は男に尋ねたい事で いっぱいだったが、それは周囲の皆も同じだろうと様子を見る事に決めた。

「エレベータの定員数は7名ですので、まずは順番に お並び下さい……」

男は案内をし始めた。屋上へと、ライブ開始を待つ人間を一人ずつ丁寧な対応で。この上下に移動する箱の中へと……導いていく。

愛も順番を待とうと、列に並んだ。

自分よりも もっと前に先ほど愛に声をかけた女の子達が居る。

しかし向こうは愛の事など これっぽっちも気にする風では なかった。ただ、おしゃべりをして時々 叫んだり騒いだりしているだ

けで。

Party。パーティ。社交場。

……上っ面。

愛の耳にレンの声が聞こえたような気がした。ただそれは、
幻聴にしかすぎない。

(人間なんて表では……)

鏡が手元に今はないけれど。家の玄関の鏡で見た自分の顔を思
い出していた。

いつもより入念に化粧をされた、外での自分の顔を。

(綺麗に着飾っているだけで……)

僕も そうなんだ

「ささ。どうぞ。足元にご注意ください」

愛は俯いていた顔を上げて声のした方を見た。

若く、まだ少年のようなあどけなさを残す顔が愛を見ていた。

「ありがとう」

愛は導かれ、箱の中へ。7人の人間が皆入り終え、出入り口に
一番近い女の子が開閉ボタンを押そうとした時だ。

愛は気がつく。

そして、ボタンを押そうとした女の子に向かって少し荒げた声を
出した。

「ちょっと待って！……すみません、降ろして下さい」

愛は乗りかけたエレベータを降りた。

不思議がる、乗客と案内人の若い男。しかし愛は気にする事もなく、「すみません、先にどうぞ」と詫びの言葉を言うと駆け出して行った。

若い男は走り去る愛の背中を少し見ていたが、やがて自分の役割を思い出し仕事に戻った。

「さ、定員 空きましたので一人、中へどうぞ」

愛は走った。一人の男を追いかけて。

片手には、茶色い革の札入れを持つ……つい さっきエレベータの前で拾い上げてきた札入れだった。考えるよりも先に愛は体の方が動いていた。

「あのっ……」

ビルを出て、道を歩いている男の背中に呼びかけた。

黒のジャケットに薄汚れた黒地のジーンズ。被る黒のキャップには、シルバーで骸骨の装飾が施されている。両耳にもシルバーのシンプルピアスが光っていた。

呼び止められ、すぐ傍で。目線より下で息をつき自分を見上げている愛を見た。表情は変わらずに。

「これ……」

愛の手から差し出されたのは札入れ。男は黙って受け取った。

そして札入れと愛を交互に見て しばらく考える。「……」

呼吸が落ち着いた後、愛は冷静になって事情を説明した。

「エレベータの前をあなた通った時、落としたのが見えたから……」

そう。

愛がエレベータに乗り込んで出入り口をぼうつと見ていた時。入り口の前を この男が横切ったのだった。

札入れを落とした事にも気がつかずに。ただ、通過した。誰かが拾うだろう、あの男もすぐに気がついて戻って来るだろう……。

しかし誰も札入れには気がつかない。知っているのは、愛、自分だけなのだ。

別に善を考えた訳でも、迷っていた訳でもない。愛はただ……走り出した。

「わざわざ届けに？ ……サンキュ」

男は少しだけ笑って札入れをジーンズの後ろのポケットにしまった。愛は男の顔をよく見ようとした。しかしその前に男の手が愛を引っぱり出す。

「お礼する。その自販機でジュースでもどう？」

「え。……あ、うん、はい」

男が指さしたのは、数十メートル先にある、ネオンが派手に目立ち光るゲーセン前の自販機。ピコピコといった電子音や、ガチャガチャといった機械音のやかましい音と分かる。それが店先から聞こえてきて雰囲気想像させる。

愛はゲーセンに行くのが久しぶりだった。昔は兄や友達に連れて来られたもんだったと。

男の手に引っぱられながら、愛は思い返していた。……

自販機でそれぞれ一本ずつ飲み物を買う。無論、男のおごりで。愛はペットボトルのお茶を、男は缶コーヒーを買った。「ちえ、冷たいの、売り切れ」と男は舌打ちした。

冷たいのがよければコーヒーを止めればいいのと思った愛だったが黙っておいた。買ったお茶を少しずつ口にする。3分の1程度を飲んだ後、フタをしめた。

「これで、お礼、終わり」
と、男は軽く笑いかけながら自分の飲み終えた缶を自販機の横にあるゴミ箱に投げ入れた。

これで、お礼、終わり。

何で そんな風に言っただろうと愛は思った。確かに、飲みたくて自分は購入したわけでは ない……この男の気が済めばと ついて来たただけだった。

たてまえ 建前。表向き。虚偽。嘘。うわべ……上っ面。

「パーティー……」

愛の口から自然と こぼれた。

「パーティーが なに？」

愛の考え込む顔を微かに笑ったまま覗いた男。愛は誤魔化すように つられ笑いを。「何でもない」

それから、ハツと思い出して目を見開いた。

7時、5分前。

店の入り口から店内の壁掛け時計が見えた。時刻は、もう そんな時間を表している。

ライブ開始の時刻が迫る。

「いけないっ、ライブ始まっちゃっう！」

愛は言うのと、走り出した。しかし ちゃんと走る前に「それじゃあね！」と一言だけ言い残して手を振って。

男の事など もう置いてきてしまった。後ろで男が どうしているかなど、愛の頭の中には もう居ない。忘れた。忘れてしまった。愛はライブに行く。

レンに会うために。

それだけに。

本を開いてごらんよ

嘘ばかり 書いてやがるから

見えやしない

真実は何処

だまされている

だまされて 喜んでいる

人生は お飾りなんだ パーティーなんだ

……

愛が去った後。

男も、走り出していた。愛を追いかけて。まだ、自分の見える範囲の所に愛は居た。愛は決して振り向かず、ライブハウスへと一心に。前だけを見ている。

男は愛の背中を見ながら、走りながら、ジャケットのポケットから携帯電話を取り出した。

そして すぐ誰かに電話をかける。相手も すぐに出た。

「今から行く。そっちはOKか」
『ああ。全員 入場 完了。あんたらだけだ……面白いな。数も一寸の狂いなし』

男はタマラナク愉快に笑う。

「いい答えだ……ようこそビサイド」

残念ながら走りながらの大笑いは少し苦しかった。愛を見失わないようにも だから忙しい。

「もう着く。じゃあ後で」

相手の返答を聞くまでもなく電話を切って元あったポケットにしまった。

相手は最後に言った。

『早く来いよ待ってる……レン』

イージー・カム

3話（お礼）（後書き）

B e s i d e
ハズレの人達。　　くをはずれて

4話（よじいそ）

E a s y C o m e . . .

遅刻だ。

愛は、焦燥と諦めの狭間に居た。もう開演時間の7時なんてとつくにまわっているんだろう。

せっかく自分は余裕を持って家を出て来たというのに。それなのに！……と。

愛はビルに戻って来た。そして、突き当たりのエレベータへと直進する。心境は文句の一つでも直接つけに来たクレイマーと同じだ。憤慨。興奮。今の愛は行き場の ない悔しさで全身を支配されていた。

エレベータの前には案内人の男が一人。

礼儀 正しい彼は愛を見て微笑んで出迎える。

「お待ちしていましたよ」

「！」

自分の猪のような突進を止められて。一歩 後ろへと引き下がってしまふ。

（待っていた……？）

何の こつちやと、片方の眉を上げて今さらながら この男を不審に思った。愛を見る目が突然、いやらしく思えてしまったりと。

「ははは。変な目で見ないで下さいよ。あなたが最後の お客様です。他の皆さん、もう上の階へ行かれましたよ。ささ、乗って下さ

い。あなたが着くまで、ライブは始まりませんから」

自分が戻って来るまで待つてくれていたというのだろうか。
とにかく感謝した。愛は開いたエレベータの出入り口から中へと
入る。

案内人の男は入っては来ないで、入り口の前に待機していた。す
ぐに入り口を閉めないのは何故だろうと思っていた矢先、すぐに目
の前の光景に目が行く。

先ほど愛に お茶を礼だと称して おごってくれた男が走り寄っ
て。エレベータに乗り込んで来た。

そして すぐ出入り口が閉まっていく。

愛は「あ」と声を上げ、男を凝視した。肩で息をつき、前屈みに
なつて両手を両膝に当てて乱れた呼吸を整えようと している。

愛の視界には、彼のキャップの先端しか見えていないが。

「ふう。間に合った。早い早い」

やっと声と同時に体を起こす。愛と視線が重なった。

「……？」

顔に見覚えがある。愛は それもあつて また不審な表情を浮
かべた。

この狭い箱の空間に2人きり。

男と女。

不安に襲われていた。

「俺もライブに行く」

「？」

男は突然そんな事を言い出した。

「遠回りだけ」

エレベータは2人を乗せて上へと走り出す。

人を運ぶ事しか能の　ない箱。……きっとレンなら　そう言うんだわと、不安の消えない愛は必死にレンの事を考えていた。

レンが自分を護ってくれますようにと……。

「なあ」

「え？」

いつの間にか横並びに並んでいた2人は、一方が話しかけて徐々に愛の心中を落ち着かせていった。

「お前、小学生の割り算できる？」

男は入り口の方を向いていて、1階ずつ箱が昇る度にパツ、パツ、と移り変わっていく階数表示のランプを見ていた。

愛は質問の意図が分かりかね黙っていると、男はペラペラと口を動かしていった。

「100名様　限定ライブ」

箱は止まる事なく指定された通りの階へと。

「エレベータの定員は7名ずつ」

上昇していく。

「俺らで最後」

止まらない。

「1000わる7は？」

チン。

到着の合図。

エレベータは2人に知らせた。着きましたよと。

しかしながら2人の耳には入らなかったようだった。

愛が解答を言う前に入出口は堂々と開く。到着したと思い込んでいた愛は先に降りた。

屋上では なかった。

(あ、あれ……?)

愛は訳の分からないまま、2歩3歩と自然に進む足は、やがて立ち止まる。

呆然していると背後から声がした。

「ようこそ選ばれたゲスト様」
振り向く……。

男が、箱の中で突っ立っているだけだ。

微かに笑い そして。

「選ばれた……?’

愛の瞳に光が一つ差し込まれる。閃きという光が。男の顔に見覚えが。ええと……。

100わる7は、14と……

……あまり2人。

私と……

「レン……!」

レンの歌が脳裏に重なる。ああ　まただ。いつも私を　からかう
かのようにしてレンは。

眞実は何処

だまされている

だまされて喜んでいる

人生は　お飾りなんだ　パーティーなんだ

あなたも　そうなんだ

「窓を見て開演を待ってて。すぐ行くから」
パタリ……エレベータの出入り口が静かに閉じた。愛だけを降ろ
して。

男は……。

「レン……何故……？」

頭の中が混乱している。一人　残された愛は頭を抱えた。

一体、私の身に何が起こったの……？

さっぱり訳が分からないままに、愛は閉じられたエレベータから
屋内の方へ視線を移した。

床は、鉛丹色　一色の絨毯じゅうたんが一面に敷かれている。愛はパンプス
を履いていたが、少し強めに足で床を叩いても　ほとんど音を吸収

してしまった。

歩を進み歩いても足音が全く しない。

愛は天井 近くにまで高く大きい窓ガラスへと向かう。何も考えず……いや、訳が分からないので無意識に、といった所で だろうか。

何処かで、声が微かに聞こえた気がした。間違いなく外でだとは思っていた。しかし。

この部屋は、何……？

どうして私は あの案内人の男やレンに ここに連れて来られてしまったの？

窓際に向かって、ガラス製の天井が のった鉄の一つ足テーブル。そして白い、オフィスなどで来客用として よくある普通の2人掛けのソファ。

そこから少し離れては いるが、邪魔に ならない程度の距離の所に観葉植物のアレカヤシが白い鉢に植えられて置いてあり、リラクゼーションの演出効果をもたらしている。

どうぞ、お寛ぎ下さいと言われてるように思えた。

それ以外に屋内には、何も物は置いていなかった。

「……………」

心細い愛。

先ほどのレンの姿が やっと冷静に なってきていた愛の頭の中に浮かび上がってきた。そしてレンの口から放たれた言葉が蘇ってくる。

“窓を見て開演を待って”と、彼が言い残した事を。

「窓を……」

愛は窓際へと寄って行く。するとだ。

ダダダダダダ。

はつきりと、何かを叩く音が聞こえてきた。愛には聞き覚えのある音。

そう、ドラムだ。打楽器だ。

「！」

向かいのビル！

愛は驚いて大口を開けてしまった。

向かいのビルは、今 愛が居るビルより5メートル以上は離れ、建物の高さが低い。よって、愛の居る階の目線では ちょうど向かいのビルの屋上あたりが位置している造りになっているのだ。つまり愛の目の前は。隣のビルの屋上『ステージ』となっている。

そして愛の視界に広がる その屋上『ステージ』には。

「……！」

愛には、信じられなかった。

『ステージ』の中央あたりに、ドラム。ドラム奏者が。

ベースギターを抱えた人物。キーボード2台を横に並べて待機している目立たないワイシャツの男。

愛には名前の分からない機材一式が。

ダダダダダダ……

ドラムは、小刻みに軽快そうに ただ叩かれる。

ギョワンンッ……

恐らくベースギター。チューニングでもしているのだろうか。そんな調子の音を。

そして、一本足のマイクが『ステージ』の中央に堂々と存在する。

愛の心臓が高鳴ってくる。

彼らを知っている。バンド『SAKURA』のメンバーだった。

だから当然、あのマイクのポジションに現れてくれる人物は決まっている。

愛は窓に両の手の平をついた。窓は鍵がついていなかった。

窓が開こうが開くまいが、どうでもよかった。愛は興奮して、激しく脈打つ心臓が喉から叫びと共に飛び出してきそうだった。

やがて『ステージ』に現れた人物。さっき見た格好と同じ。

「レン！」

5話（爆弾）

E a s y C o m e . . .

何て事なの……！

愛の大きく見開き切った両の瞳に、光景が ただ映る。

向かいのビルの屋上。愛の居るビルより階数が少ない為実現し成り得た、『屋上ステージ』。

愛の居るビルの階の目前に それは広がっている。

最低限 演奏に必要な音楽機材と、それを扱う人間達。

それはキーボードと、ドラムと、ベースギターと、マイクと……バンド『 S A K U R A 』のメンバー。

愛の居る位置からは大きく数メートルは離れているけれど。愛が求めている『彼』は、愛の ほぼ真正面に居た。……

『彼』……“レン”が……

あの、レンが。本物よ、間違いない、確かにレンが、こんな近くに。

鍵の付いていない窓は愛が押さえつけても開かない。叫んだとしても その叫びは果たしてガラスを超えてレンに届くのかどうか？
いや……。

愛は両手をガラスに ぴったりと吸いつけて、ただただ釘づけになるばかりだった。

あなたに僕が見えますか

あなたに僕の声が聞こえますか

見えやしない

届きやしない

……

愛は悔しかった。

愛とレイを隔てている、この窓ガラスと距離が。存在が憎く。

それほどに興奮している愛。吸いつけた手の平は両方とも今度は、固く握り潰すほど強く握り締めて。

曲は始まった。

一曲目はデビュー曲だった。愛も当然 知っていて

曲目 開始と同時に、ワアアッ！ と歓声が天井から沸き起こった。「!?!」

愛は轟音とも聞き取れた振動に身を竦ませた。縮こまった体がやがて ほどけてくると、怖々天井を見上げる。天井 自体には、何も変哲は なかった。

(さっき賑やかな音が声が したかと思ったら……そうか、この上って)

愛は やつと理解が できた。自分の居るフロアは、最上階。この上は『屋上』なんだと。そして屋上には恐らく、自分を除くバンドのファン達が居て、そこから見下ろすようにライブを観ているのだと……。

何故だか自分だけがここへ連れて来られ、置いてきぼりにされたんだと。レンに選ばれて……。

選ばれて？

愛はレンを一心に見つめた。片時も目を離すまい。そう決めて。しかし。歌うレンは一向に愛と視線を合わす事はなかった。ライブ中、ずっとである。

それは奇妙な事ではないかと、時間が経ち曲目が進むにつれて愛を動揺させていく。

（まさか避けられている……？ 何で？ 自分達が私を選んだんじゃないの？）

訳を教えて。自分を選んだ理由をと……。

そんな心の暗中で解釈を模索している勝手な思考のせいで、愛は歌に集中できないでいた。レンは音の波に乗って、その誰も羨む自慢の声を自由に弾ませている。天性のその声を、複雑に即興で奏でられアレンジされている音の譜に便乗させて。

とてもレン本人は楽しげに、キーボードを叩いているメンバーの所へお邪魔してみたり。ベースギターのシークと同じマイクで歌ってみたり。せつかくの美声も時々わざとなのか裏返ってみたり、ドラム奏者にマイクを渡してみたり、屋上中を走り回ってみたりと。子どものように、大はしゃぎで。

自由のように奔放で。

彼は……遊んでいる。

そして観客は。

ワアアアアアア……ッ！

天井から響いていた。恐らくファン総勢98人。愛の頭上、屋上

からだ。

愛からでは全く見えないのだけれど、地響きかと思われるくらいの歓声。叫び集まりとなった声の群集は脅威だった。

もし愛も その中に居たら。

きっと、空気と音の波と勢いと活気と人と、あらゆる考えつくもの何もかも全てに押され潰されてしまおうのではないかと思わされるほどに。

愛も ここで、レンを含む『SAKURA』のメンバー達と一緒に なって。

レンと。

音と。

声と。

一体化する、いや。

支配される。

チン。

愛は気が つかなかった。

自分の背後で、エレベータの出入り口が開いた事に
そして。

何者かが、愛に近づいて来た事に……。

……

イージー・カム

舞台では曲目が進み夜も時は進んでいく。すでに左右上下からライトアップされていた。

光をも支配しレンはその作り上げられたイリュージョンの中でマイクを離さず。気の済むまで踊り狂う。

髪を掻き上げるたびにファンは興奮して歓声が沸き、片手を突き出せば屋上の手すりを超えそうにファンというファンが手を同じくレンを求めて突き出す。

そんなシヨウが続く中。突然、歌の最中に全ての照明が消えた。

(え……?)

月と周囲のビルの明かりだけに なるステージ。

もちろんファンは悲鳴を上げた。しかしレンを含めてメンバーは落ち着いている……。

愛も一瞬だけ驚いたが、たぶん演出だと思っていた。

エレベータの事がある。何か仕掛けがあるのだと。

ワクワクと、好奇心が勝ってきていた……愛だった。

だまされている

だまされて喜んでいる

人生は お飾りなんだ パーティーなんだ

……ふと、愛の脳裏に蘇ったフレーズだったが、それが予感だとは気がつかず。

愛は次に来るレンの言葉を抵抗も なく正面から受ける事となった。

『本日をもって、バンド SAKURA は解散する』

ほどよくファイナーレが そろそろかと思わしき時の舞台に、衝撃という爆弾が炸裂した。

あれだけ騒がしかった場は不気味なくらいシンと寸秒 静まった。愛も。呼吸を寸時だけ忘れ去る……

「イヤ アア アアッ……！」

まず女子の誰かが金切り声を上げた。「嘘よおおお！ レエエ エンツ！」そして続く。

「キヤア アア アアッ！」

断続的に高音は仲間を増やす。

ここは何処だ。戦場か。それとも亡者の蔓延^はる灼熱世界の地獄の底なのか。阿鼻叫喚は散布しファン^ンの悲鳴は暗い空へと広がって伝染していった。一体、何が。

愛も、訳が分からず叫びそうだった。その時。

「レンは、才あるが故に不幸だったんです」

愛は振り向く。

愛の背後3メートルあたりで、案内人の男が立っていた。愛を通して、バンドのメンバー達を見つめている。とても優しい目をしていた……。

（才あるが故……？）

愛は麻痺したような頭で男を見ていた。先ほどのレンの言葉が体から抜けていない。男の言葉を素通りしてしまいそうになる。

「どういう事なの……？」

泣きそうになる。

男は語る。

「レンの気まぐれに付き合わせてしまっただけです。今日の舞台を最後に、レンは音楽界から去るつもりです。これが彼なりのけじめだと。もう今後、表に上がってくる事は ないと……」
「どうして!」

愛は叫んだ。怒りと悲しみをぶつけて。でも それだけでは無論気は治まらない。

男は坦々と語る。

「大手 音楽プロダクションからの話が来ました。ただ それは……彼の自由を奪う事になる。詳細は お教えできないので伏せませんが、プロへと なる以上。彼は今までのように好き放題に歌う事が できなくなるという事です。それと」
「まだ語る。」

「彼の歌は……公に出すには、危険すぎる」
「そんな事を言った。」

危険？

愛の背後と なっていた、窓の外でレンがマイク越しに言う。

『次がラストソングだ……聞いてくれ』

6話（支配）

レンは両目を閉じた……。

そして全ての照明という照明は、レンを主役に ひとつひとつと浴びせて彼に注目し味方した。

光の熱さなど おくびにも出さず、レンは一本足のスタンド先のマイクを上から両手で被せ握って、姿勢のよい立ち姿で静かだった。息を止めて沈黙したかのように……静かだった……た。

ワン、

ツー、……

ドラムがリズムをとる。

カ。

長く太いドラムスティックの、ドラム端を叩く一叩きに合わせて各メンバーの楽器の音は個性で勢いよく飛び出した。

ギユアアアアンツ！

一番目立つのはギターの音。そして、

ギユアアアアンツ！

音が世界を支配する。

ギユアアアアンツ！

音が世界を支配する。

ギユアアアアンッ！

音が世界を支配する。

ギユアアアアン。

音が世界を ……

俺が 音を 支配 する。

……さあ見るがいいとレンは悦に笑い転げた。とても楽しそうに。そして起きて助走をつけて跳び、2台あるうちの1台のキーボードの所へと着地した。彼は鍵盤を感覚か気分だけで叩き出し、滅茶苦茶な不快音を出して何だ下手くそと皆に思い込ませたと思ったらだ。

……

破壊的だった音の侵入者は、正確な旋律の中へと次第に融けて一体化していく。

これが見事というものだ。

無謀とも思えた弾き方は、レンの細い指によって音の元々に持つ性質を見極め最大限に引き出されて。皆を圧倒させた。

音の調和と融合。そんな簡単にできるものではない。それを軽く直感だけで やつてのけてしまう その才能、そのセンスとは。……

……彼は何だ。化け物なのか……？

完全に今居る世界は彼のものだった。この空間を手中に入れている。彼は ここでは神なのだ。神に逆らう事など許されない。

「レン……ああ……」

何故だか愛の薄くなった視界の目から とめどなく涙が。理由は分からない。

愛の心の臓は打ち震えている。

感動 とは、 こういう事だ

愛は確信していた。

これが感動。これがリアル。心も涙も本物よ。レン、私は あなたが

「きゃ あ ああ ああ ああ！」

「！」

脳天を突くような悲鳴。

その後 人知れず心中で酔いしれていた愛の視界に一瞬だけ、信じられないものが飛び込んできた。

人だ。

女性。

愛の視界に焼き付いた。人が ひとり、空から落ちてきたのだった。「！」

開かない窓の向こうでは、毅然とした態度のままのレンが独立したマイクを握って歌を歌い続けている。動じる事もなく。何事もなかったかのように。

何もなかった？ ただの錯覚か幻想か、夢まぼろしか。さては演出よ、とまで考えた愛だったのだが。

それは全て間違いだった。

「嫌よおおお！」

「やめないで！ レエエエンツ！」

「いやあーっ！」

声と共にだ。

人が、落ちてくる。

ひとり。

そして また、ひとり。

愛は驚愕し絶叫する。「いやああ！ やめて！」 耐えられないと。

頭を抱えて数歩 後ずさりすると、すぐ後ろに居た案内人の男に肩を受け止められた。

「大丈夫です。予想は してましたから。こんな事」

彼も平然だ。微かだが、彼の首筋に つけていたシトラス系の香水の香りが漂う。愛は茫然自失としたまま、瞳の消えかけそうな光でレンを見た……た。

初めてレンと視線が真正面から ぶつかる。

絡み合った。「……」

身体が支配されている。
流れる涙は、誰のもの。
レンは……言った。

E a s y C o m e . . .

得やすいものは

……。

……

……照明が全て消える。

ライブの終わりを告げる合図。同時に解散をも意味している終わり。

だが愛はラストの曲を一切 覚えていない。何も頭に入って来ない。居ない。

「……終わりましたね」

肩を掴む　すぐ傍の男の声も。

何も耳に聞こえない愛。

何も……。

「どうしますか？ 帰りますか？ なら早く なさらないと他のフアンの方達が降りてきてしまいますので……どうか お急ぎを。フアンの方達に　こんな境遇だった事が　もし分かってしまったなら、あなたは恐らく　」

愛に言葉を発せられる余裕など、まだ持ち合わせては　いなかった。まだ頭の中は　ぼつと。

だが　しかし男の声は愛の反応を無視して続く。
「……八つ裂きに　されるでしょうね」

もう舞台だった屋上には何も　ない。全ての照明は消されて、真
つ暗闇だった。

レンも他のメンバーも何処かへ行ってしまうって、居ない。

「何なら、ご覧に　なって下さい。外の下」

肩を押されがちに、魂を抜かれた人形のように　なった愛は虚ろ
な顔と心で歩を進めた。男の言うがままに歩かされ、窓際に寄せら
れた愛は下の階を見下ろした。

男が大丈夫だと言った理由が分かる。

四隅をフックで頑丈に取り付けられた白いエバーマットが用意さ
れ吊られていた。そして　その上に、先ほど落下したファンの女の
子達　数名が仰向けで倒れている。もちろん生きていた。

彼女らは、屋上の手すりを飛び越えて跳んだのだ。とても隣のビ
ルに届く距離では　ないとしても。跳んだ……レンに、近づくため
に。

命など惜しまずに……。

「あの子は……」

落ちたひとりには、ここに来る前に会話をした　あのキャミの子。
目は両方とも開いている。一体、何処を見つめているのか。空か。
あの黒い、ビルとビルの間に見えるだろう、夜の空か……。

それとも彼女の目には、レンの姿が映っているのかもしれない。

自分だけを見つめている、自分に　とつての都合のよいレンが……。

でも　ふと思い出す。

彼女が好きだと言ったのはレンでは　ない。他のメンバーだった
はずだ。

「嘘だったの……？　ギターのシークが好きだって……」

愛をからかったのか？　それとも、レンに乗り換えた？　または
……。

イージー・カム

レンの声は危険すぎる

7話（歌詞）

あの まだ生まれたてだった頃。僕らは皆 幸せだった。
円を描くように 夢 描いてた。……

その先を知らないで。

……

終演の時。

立つ鳥は跡を濁さない。

小さな羽を広げて、彼は 大きく羽ばたく。

月 照らす闇の中を自由と思い方向を定めず。

先を求めて。

愛は黒の空に見えない鳥を見つけて、それが幼きレンを想像させた。

「『Easy Come』の歌詞の中で……」

窓から見えるビルの夜景とガラスに映る自分の瞳を見た。

どちらも温度を感じる事は ない。

「レンに聞きたい……」

愛の呟きは、窓の向こうの世界に伝わるのだろうか。

「あなたには分かる……?」

誰に語りかけているのかが はっきりと分からない、迷いとも聞こえる呟きは、きっと届かない。何も残されていない目の前の漆黒のステージには、誰も居ない。

「何処の部分でしたでしょうか？」

急に現実に引き戻される言葉を返してきたのは案内人の男だった。ずっと愛の傍に居る。いまだ彼の素性は知れない。

男を改めて見る。白のカッターシャツに黒のズボン。飾らない体質の細身の男。

何処か落ち着いていて安心を人に与えてくれる。

「ベルと、本……」

愛は かつて自分が訳した歌詞を記憶の底から掘り起こす。一字一句、正確だと自分では奇妙にも確信していた。

『 僕は ベルを信じた 信じすぎていた だから離れた どうしようもなく（無力だった） 』

「私は、ベルとは……夢なんじゃないかって。決めつけていたの。何となくだったけど……」

『 本を開いてごらんよ 嘘ばかり書いてやがるから 』

「週刊誌のゴシップを見たとか、バッシングでも受けたのかと……勝手に色々と想像してた」

『 だまされている だまされて喜んでいる 』

「誰も本当のレンの心なんて知らない」

『 人生は お飾りなんだ パーティーなんだ 』

「人は仮面を被って人生という社会へ出て行くものだ」と

『 僕も そうなんだ 』

「私も……あなたも」

『 得やすいものは 』

「皆……ただの お飾り」

The one obtained
Easily is destroyed at once
得られたものは すぐに壊される

「レンは、プロには……なれないのね」

愛はクス、と軽く笑った。馬鹿に したのではない。おかしな事ね、と思った途端に笑えてきたのだった。

好きなように歌って好きなように過ごしただけなのに。
社会の鳥籠は彼を捕まえようとするのね。珍しいから。
でも悔しいわ。鳥籠に入らなきゃ、社会では生きていけないの。
悔しいわ……。

「プロに なっても歌は歌えます。彼の好きなように。存分に歌えばいい」

と、案内人の男は始め見ていた夜景から目を逸らし、エレベータへと歩き出した。そして『下』への階ボタンを押す。

エレベータは下の階から上昇し、音も なく近づいて やって来る。

「レンを求めて屋上から跳び降りようとも、レンの声に毒されてフ

アンが自殺しようとも」

愛から離れた男の抑揚の ない、けれど下へと吐かれ沈みそうな
声は、重く愛の耳にも充分に響く。

ジサツ？

愛は眉をひそめていた。そんな事実は全く知らず、だが しかし
確かめるまでもも行かずに愛は胸中へと押し込んだ。

男は話す。

「レンの知る所では ない。ファンが どのような末路に なった
所で、彼の罪では ない」

チン、と。エレベータは到着する。まだ男の饒舌は止まる事は
なかった。

「彼の歌詞を知っているんでしょう？ ……彼は何と叫びましたか」
愛は言われて即座に脑中の記憶のページを開く。ええと、と。

「『 壊れ出したら 止まらない、誰か …… 』」
思い出しながらの言葉と、重なる記憶の中のレンの幻想。

愛とレンの幻の声は、2つが ひとつに。その言葉とは ……。

Someone, help

誰か、助けて

……

エレベータの入り口が開く。

男は愛を招いた。「どうぞ ……」

片手は入り口の扉に添えられて閉じないように。もう片手は、中
へと愛を導くように。

男は案内人。それが男に与えられた仕事だった。

「……」

しばらく、愛の時間は止められていた。

だが、再び愛は動き出す。男に誘われるがまま。与えられた見えない恐らくは赤のカーペットの道を辿るように……それは当然のよう。

愛はゲスト。お客様。今日、この特別な場に招待された、選ばれた。

「あなたならレンを救えるかも しれないと思いました」
閉ざされようとしている箱の前で、男は言った。

「誰も拾わなかった札入れを持ち主に届けてくれた、あなたなら」
「あれも……？」

今から思えば、と愛は顔を赤らめた。何も考えず、何も見えず。愛はレンがレンだとは思っても ならず、気が つかず……普通に追いかけて、普通に話しかけて、普通に お茶をおごってもらい。

思い込みだけで過ごした時間 恥ずかしくて たまらなくなつた。

そして あの所作の数々も。エレベータも同様。レンの仕掛け？
畏？

わざと札入れを落としてファンの子達を確かめた？ ……愛は両手で顔を隠した。

赤い顔を隠す仮面を持ち合わせてなど いない。
察した男は目を伏せて、愛を見送る事に した。

「きつと優しい……あなたなら」

パタン……入り口は閉じられた。

エレベータは、すでに押されていた『一階』へと下降して走り出す。

愛だけに乗せて。

僅かに聞こえる機械の音は、うるさくは なかった。むしろ……

静かだと思えていた。下へと引っ張られる重力という力を心地よく
全身で感じていた。

その中で愛は。また。

レンの幻の声を聞いてしまう。歌声では ない、生々しい声を。

これで、お礼、終わり。

8話 (Candy)

愛は帰路を急ぎたくなかった。時計は夜9時を回っていた。ビルを出たものの、道先を失う。

帰りたくない。こんな後味のまま帰ってしまったのは。帰る前に目だけでいい、彼にと。

レンに会いたいと。

「……」

数台しか停まっていない車の駐車場の横舗道をフェンス伝いに歩き、電柱に汚く立てかけられた看板の前を通りすぎる。雑居ビルや、閉店シャッターの下ろされた商店と商店の間の路地を頭ぼんやりと、また、気持ち ゆっくりと……そして暗闇に怯えるようにも歩いていた。

駅へと向かっているようで、いつそ違う道を歩いてしまいたかった。

そんな愛を、明るく楽しげな光が騒がしく迎えてくれる。

ゲーセン……ゲームセンターの照明だった。

「……」

店内は眩しいほど明るかった。明るさが、ライブ前の時よりいっそう増している。

レンに お茶をおごってもらった場所。

だが、愛は彼がレンだと正体に気が つかなかった。思い出すたびに顔を赤らめ、焦りが生まれる愛。 恥ずかしい。

愛は店内に入る。

UFOキヤッチャーやプリクラ機が幾台も並び、小さな段差を踏んだすぐ奥はカウンターと、テーブル型やレーシングなどの固定型

の筐体、ダンスや太鼓ができるアーケードゲームなどが詰まっ
て設置され、男がパラパラとまばらに数人居た。
ゲームの音や店内に流れる最新ポップの曲だけで、人声も
落ち着けるようだった。

昔は兄や友達とよく来て遊んだ事のあるゲーセンという場所
が大きくなってからはプリクラ程度で、もうほとんど来る事
がなくなった。

懐かしくもあり、新鮮でもある気がした。

久しぶりに何か一つくらい遊んでみようかと愛は思いつ

「あ……」

ちょうど愛の視界に入ってきたのは、丸い半球型のケースに入
ったクレーンゲーム。

お菓子を中で掴んで落とし、ゲットする。それだけのゲーム。お
菓子を取ってくれるクレーンをボタンで操作し、その押すタイミン
グさを要求されるものである。

景品は、お菓子。駄菓子。ほとんどはガムか飴キャンディ。

見ると、ガムが入った小箱は積み重ねられ塔を作り、少しの衝
撃でも加えられたらすぐに崩れそうになっている。崩れたら難
なくお菓子は受け取り口へと滑り込まれ手に入る。

こうやって仕掛けておいてお客を呼ぶのだ。さあ、取ってみ
て下さいと挑戦的である。

「ようし」

愛は誘いにのる。財布から硬貨を取り出し、数回分投げ入れ
た。

クレーンが動き出すと、愛は回転してまわってくるキャンディ
の集団をめがけてスイ、と……始めは上手くはいかず、2・3個
しかすくえない。ガムの箱の塔はビクともしなかった。「ムムム」
苦い顔をして再挑戦。

何とかコツを掴もうと、愛はゲームに没頭している。

自分の向かいのプレイゾーンに人が来たとも知らずに。

黒のジーンズ、シルバーの骸骨が装飾された黒のキャップ帽。シルバーの耳ピアス。

上下の上だけを黒地のTシャツに着替えた『彼』は、たった一回だけのゲームプレイで見事に景品の お菓子を多量に手に入れた。彼は景品を取り出すと愛の元へと寄る。

愛が「え？」と、やっと気が つき男の顔を見ようとする前に。彼は愛の手を掴んで手の平の上に。

今 自分が手に入れたばかりの景品をのせた。「あげる」

そして足早に去る。

愛の反応など無視をして。

いや、無反応に近かった愛が悪かったのかも しれない。彼は店の出口から出て行かず、手前の、地下へと続いている階段を下り始めた。

「レンー！」

愛は追いかけた。突然、作動スイッチが入ったかのように。

止まりかけた愛の中の全てのものが、動き出して……待って、立ち止まってと乞い願う。

階段を折り返して下りようとしていた彼の足元に、バラ、バラ、……と。

愛が落としたキャンディ達が愛より先にと追いついて ばら撒かれた。

レンは立ち止まる。

段上を見上げる。

段上では、立ち尽くした愛がレンを見ていた。

既視感……では、ない。

ライブの時には一瞬だけ見つめ合った2人。確かに、あの時に。

確実に視線と視線が絡み合う。

「待って……」

やっと絞り出せた声。精一杯だった。

今度こそはレンに気がつく事ができた。もう あんな盲目な

馬鹿ではないのよ、と。

汚名返上の思いも含まれていた。

レンは何も言わない。

半身だけ振り返っていた状態で、キャップに隠されそうな目で愛を睨むように見ると……。

キャンディを拾い上げる。

集めて、愛の元へ。

愛が手を受け皿にして受け取ると、一個だけ。レンはキャンディをヒョイと摘み上げた。

「一個もらい」

包みを開け、キャンディをポイと口へ。少し美味しそうに食べた。

「あなたには驚かされてばかりね……ライブ、凄く感動した……」

レンは、「フウン。そう」と適当に相づちを打った。愛は話し続けた。

「素晴らしい歌、素晴らしい演奏、声、演出……お金なんて かけなくても、充分に私は満足だった。ありがとう、レン……でも……」

愛の興奮は、次の一言から沈んでいく。

「あなたのパーティーをもっと楽しみたかった……」

パーティー。仮面舞踏会。社交場。上っ面。表面。人生。

バンド『SAKURA』の……レンの、解散ライブ。

パーティーは終わりだ。

「光栄だね。それだけだ」

レンの反応は冷たいもの。

ああ、やっぱり……と愛は心の軋む音がした。実際の彼は、捻

くれている。これはきつと。『Candy』のせいね。あなたは逃げてしまう……“臆病”の方の「

そう愛が言った時。

レンは少し驚いた。しかしすぐに調子を取り戻し嫌な顔をする。

「へえ……？ あんた、知ってたんだ単語の意味。驚いた。たかがファンなんてノリだけだと思ってたのに」

愛の言葉など聞いていないかのように振る舞う。愛は思いのたけをぶつけ始めた。

「あの歌は素晴らしかった。一つの単語に色んな意味が込められていて。あんな技巧的で繊細で、切ない歌……私は神を見たのかとさえ思った。あなたはうわべでは捻くれていても、中身はとても臆病者。私には分かつ……」

ダンッ。

愛の身体は、壁に押し付けられる。「……！」

怒りを露にしたレンは、激しく鋭く愛の瞳を見つめ射抜き、金縛

せる。そんな珍しくも感情的になつたレンだったが……すぐに治まった。

「ハハハハハ！」

違って、愛に一笑をくれてやる。

愛の身体はレンに捕らわれたままだった。

「俺が臆病だとか、歌が技巧的だとか。神は……ハッ、ま、いいとして……馬鹿だな」

愛を睨む。

「あれはパクリ。元歌が あんの」

……！

愛の目は見開かれる。

信じられなかった。

裏切り。

レンの言葉が突き刺さる。

「……いい事を教えてやる。人は偽る。嘘をつく。よくても悪くても、嘘をつく。人生という社会は、仮面を被る。綺麗事を言う。お客はだまされる。俺も あんたも……上っ面の社会というパーティーに参加してるんだ」

レンは愛を憎しみで見る。恐らくは愛を嫌悪しているのではない。
い。

彼が憎悪を抱く相手は。

「楽しく自己 満足に生きたいのなら、知らないふりをするんだな」
知りたくもない世界だった。

彼がプロへの扉を開いた時に見たもの。現実。それが。
臆病で、繊細な彼を窮地に立たせた。プロの華やかな舞台を前に

夢を、諦めますか。現実を、受け入れますか。

彼は混沌とし、自問 自答する。抜け出せない泥の沼に浸かる。

愛はレンを抱き締める。手を差し出した。
力の限り。

自分の腕の中に居るのは男。ひとりの男。
支えるものが必要で。今。とても必要で。
助けを求めていた。救いを。

愛は思う ええ、私は だまされている。だまされていると知
りながら、だまされている。

レン、あなたの主催するパーティーに。

参加するの。

参加したいの。

連れてって。

どうか私も連れてって。

あなたの口の中で溶けてしまったキャンディは、例え その姿形
を失くしてしまったとしても。

決して消えないから。決して。

甘い……

甘い、口づけを

歌詞 【 Easy Come . . . 】 by SAKURA (前書き)

歌詞が ないと分かりづらいと評が ございましたので、中盤で
すが記載します。

作詞は作者ですが、『英作詞・REN』で『和訳意識・愛』とい
う設定で……なので『僕』と言ってますが実際のレンは『俺』と言
っていたりなのでね。ほほ。

そして作者の英語力には誰も何もツッコまないように…… (恥)。

ではでは次話より 続きをどうぞ。

歌詞 【 Easy Come . . . 】 by SAKURA

Easy come . . .
得やすいものは……

Can you see me?
あなたに僕が見えますか

Do you ask my voice?
あなたに僕の声が聞こえますか

You will not be able to be seen
見えやしない

It is likely not to reach you
届きやしない

Everyone is cheated
だまされている

Everyone is pleased to be cheated
だまされて喜んでいる

The life is the decorated one
and a party
人生は お飾りなんだ パーティーなんだ

I am one of them
僕も そうなんだ
Easy come . . .
得やすいものは……

I n o t h i n g b u t b e l i e v e d t h e B e
l i
僕 は ベル を 信 じ た
I b e l i e v e d t o o m u c h
信 じ ず ぎ て い た
T h e r e f o r e , I h a v e p a r t e d a f t e
r a l l
だ か ら 離 れ た
I d i d n o t h a v e t h e d o n e w a y)
I t w a s h e l p l e s s i n m e)
ど う し よ う も な く (無 力 だ っ た)
I t d o e s n ' t s t o p w h e n b e g i n n i n
g t o b r e a k
壊 れ だ し た ら 止 ま ら な い
I t i s n o t p o s s i b l e t o s t o p i t
止 め ら れ な い
S o m e o n e , h e l p
誰 か 、 助 け て
O p e n t h e b o o k
本 を 開 い て ご ら ん な よ
O n l y t h e l i e i s b e i n g a l m o s t
W r i t t e n
嘘 ば っ か り 書 い て や が る か ら
I t i s n o t p o s s i b l e t o s e e t h r
o u g h
見 え や し な い
I s t h e r e t r u t h i f g o i n g t o w h
e r e ?

眞実は何処

Everyone is cheated
だまされている

Everyone is pleased to be
cheated

だまされて喜んでいる

The life is decorated one
and a party

人生は お飾りなんだ パーティーなんだ

You are one of them

君も そうなんだ

Easy come . . .

得やすいものは……

I nothing but believed the Be

lie

僕はベルを信じた

I believed too much

信じすぎていた

Therefore, I have parted afte
r all

だから離れた

I did not have the done way)

It was helpless in me)

どうしようもなく (無力だった)

It doesn't stop when beginnin
g to break

壊れだしたら 止まらない

It is not possible to stop it
止められない
Someone, help
誰か、助けて

The one obtained
得られたものは
Easily is destroyed at once
すぐに壊される

9話（天国）

愛の手が指し伸ばされる。レンを救う、唯一の導き。
愛の口づけは、彼に光を与えた……。

ゲームセンター、地下へと続く薄暗い照明の下。

辺りには誰もいない。2人だけだった。愛とレン、2人だけの
2人だけの……

「……」

静かなのは嘘。階段の段上では遠く、騒がしい軽快な電子の音や
洋楽の おちやらかなリズムミュージックが聞こえてくる。

しばらく2人は動かなかつた。目を閉じていた。そして。

離れた。

「あなた……名前は？」

無言を許さないレンは、間髪入れずに愛に尋ねる。「愛よ」

「愛……」

表情は何も示さなかつた。愛は小首を傾げてみせる。

穏やかに愛はレンを見守つた。でしゃばらない。それを思っ
た。

レンは聞きづらそうに……でも聞いてみたそうに……遠慮しが
ちに愛に小さな声で呼びかけた。

「愛」

「何？」

「一緒に……来るか？」

愛は何の事だという顔をする。パチパチと まばたきを繰り返
してレンに問いを投げかけた。

「何処に？」

レンは指で上をさす。
「天国」
少し笑いながら。

……

破壊された音楽。

かつてのビジュアル系は『破壊のために あった』と人は言う。
彼らは破壊の ために造りあげ、そして壊す。心おきなく。

だって そのために あるのだからと。
それを野蛮だと人は言う。

ならば教えてほしい。人の持つ苦しみは。
一体 何処へと向かうのか。

抱え込む精神よ。解き放て。

我は場を与えよう。

彼の歌声は、聴く者の精神を破壊する。

縛られた世界から解放されて。あなたは さあ自由に なるのだ
と。

レンの自分の自由への願いは音へと化け運びファンにも届いた。

壊してしまった。

ファンは、マンションから飛び降りる。

彼の声に狂喜し、楽園へと夢を馳せながら。

彼の せいではないはずだ。

そう思いたかった。

巧妙に隠されてしまっても、事実
は事実。消えはしない。

それが彼を追いつめる。

「実験だった。今回のライブは……全てが、計算通りの」
レンは疲れている。両手は愛から離れジーンズのポケットに半分だけを突っ込んだまま。

絶望した顔で、愛を眺めていた……とても、疲れた顔で。

「一人も こぼれる事なく99人が出席した熱心さには驚いた。俺って そんなに凄いのかよって鼻で笑うぜ……馬鹿らし」

愛に言葉は ない。

「実験……ファンが、屋上から飛び降りるかどうか。または何人」
意識は愛では なく、過去のライブへ。

「メンバーと、プロへの声をかけてくれた人達に頼んで計画したライブだったけど。ラストライブに なるか どうかより。そんなつまらない取り決めよりも。俺には、もっと大事な事が ある」

ライブは楽しかった、とレンは思っていた。だからか思い出すと、まだ身に微かながら残っていた感覚が蘇ってくるようで。レンは興奮しそうに なる。

「大事な事……？」

愛は また小首を傾げた。レンの次に出てくる言葉を待っている。本当は、レンをずっと抱き締めていたかった。永遠に、ずっと。

母の ように……と。

「もしライブで屋上から飛び降りたファンが いたら」

レンの笑みは消えて現実の愛へと視線を変えた。自分を眼差す愛の瞳は自分から離れてくれない事が……ありがたいと感謝した。
「いたら？」

レンは涼しい顔で息と気持ちいを吐く。

「俺も死ぬ」

人は死が絡む時。何を思うだろう。

レンは絶望した。巧妙に隠されながらも知り得た現実、ファンの

自殺。

プロへの扉。すぐそこに。

レンは さ迷い……止まってしまった。
ベルを信じていただけだった。

「死ぬって……そんな」

愛は信じたくなかった。両手が心中を表すように、震え出している。

「俺には行き場がない。プロになって、表舞台に立って。でも俺の声は」

死を招く。

「人を狂わせる」

好きなように歌い。

「人殺しでも いいんなら、俺は喜んで舞台に立つ」

好きなように歌い。

「怖いんだ……」

お好きなように。

俯き加減なレンを前に、愛は案内人の男の言っていた事を思い出していた。彼は確か こう言った。

『レンの知る所ではない。ファンが どのような末路に なった所で、彼の罪ではない』

レンを弁護してくれていた。彼は、レンの味方。いや、ひよっとしたらレンのファンの一人だったのかも しれない。

レンに罪は ない。

レンが、表に立つ事を望んでいる。皆が。それは きっと、そう。

愛も。周りは皆、そう。

仮面など。少なくともレンを思う人間は、被っていても望みを言う。

愛は震える自分の手を握り締め、レンに詰め寄った。
「羨ましいわ」

レンは覚めたように顔を上げて愛を見る。「?」

「こんなにも、あなたは周りに愛されて」

怒ったような愛にレンは黙ったままだった。

「愛されて愛されて。皆に望まれて。望まれて。あなたはワガ

ママ。何でも やってみなきゃ分かんないじゃない」

愛は考えた。

造られた安全な道を辿って行くのがいいと思う?

でも それは きっと、未来で後悔する。何も分からぬまま、後で恐怖を知る。

道の ない道を探しながら辿って行くのがいいと思う?

毎日に怯えながら幸せを信じて未来に行き着くのかしら。後で安心を手に入れられるのかしら。

さあ、どっちが いい?

「私は、こんな ちつぽけな場所でレンが歌うよりも。何億何千の人達が観れる事の出来るステージで、レンが思いつきり羽を伸ばして歌っているのを観てみたいわ」

愛の瞳は本気だった。当然だった。本当に、そう思っているのだから。

レンは……。

笑う。「あはははははは!」

何故、という顔をする愛。さらにレンは面白く、声を張り上げた。いつの間にか閉店 間近と なったゲームセンターの地下への途

中で。レンは満足いくまで笑った後、愛に軽く言い返した。

「何億つて。地球人口の一体 何分の1なんだ」

愛をからかうような目で見ていた。

愛は弱った顔で「う……」と肩を竦めて。何度目かは もはや分らない赤い頬をしてみせた。

握った手の中にはキャンディが。汗と熱気で溶けていないか。心配だった。

愛が手の平を広げてキャンディを確かめようとする、いきなりだった。

レンが愛を抱き締めた。力強く。「……！」

「愛……」

愛の手元からはバラ、バラと。キャンディが こぼれ、床や階段の角に当たり下へ転がって散らばって行ってしまった。

「元歌からパクったっていうのは、……嘘」

愛の耳元で真実が告げられる。しかし愛に しっかりと届いたかどうか。

愛は、キャンディと同じに溶けてしまおうかと思う。

「天国じゃない楽園に……ついてきてくれ」

2人は、ここからスタートする。

……

半年後。

それまでに愛はレンと連絡を取りあい、たびたび会った。

しかしレンは愛に、歌の今後については一切話してはくれ

イージー・カム

なかった。

レンはプロになる。

9 話（天国）（後書き）

連載の隙みて書きますので、ちとお待ち下さい。

SF小説企画祭（<http://sfifesta2008.soragoto.net/>）10月末まで。

連載で参加しております。よろしければどうぞ（SFも面白いよ）。

【さんすうリズム】

<http://ncode.syosetu.com/n9816e/>

ではでは……

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2257e/>

イージー・カム

2008年11月7日07時19分発行